様式 C-19

科学研究費補助金研究成果報告書

平成２２年　５月２８日現在

研究種目：基盤研究（B）
研究期間：2007～2009
課題番号：19360283
研究課題名（和文）　文化と景観およびその保護手法の研究
－信仰に関わる文化的景観の調査・分析－
研究課題名（英文）　Research on Culture and Landscapes and their Safeguarding
- Survey on Cultural Landscapes in Relation to Sacredness

研究代表者
稲葉　信子　（INABA NOBUKO）
筑波大学・大学院人間総合科学研究科・教授
研究者番号：20356273

研究成果の概要（和文）：信仰に関わる文化的景観について、世界遺産及びその候補地であり、また無形文化遺産としての価値も国際的に評価されているインド・マジュリ島、トーゴ・クータマクー及びフィリピン・コルディリェーラの棚田群等において調査を行い、信仰に関わる文化的景観保護の特質と問題点を分析した。また信仰に関わる文化的景観の概念及び保護手法に関する国際的な動向及び実績について、関係国際機関において情報・資料収集を行った。

研究成果の概要（英文）：Surveys on cultural landscapes in relation to sacredness were conducted and the characteristics and the points at issue for their safeguarding were identified at Majuli island in India, Koutammakou in Togo and the Rice Terraces of the Philippine Cordilleras, which are all sites inscribed on the World Heritage List or listed as candidates, and which are as well regarded internationally as having high intangible cultural heritage value. International comparative surveys were carried out on the trends and achievements in concepts and safeguarding measures for cultural landscapes in relation to sacredness by interviewing and collecting research materials in coordination with the concerned international organizations.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合　計
2007 年度	4,400,000	1,320,000	5,720,000
2008 年度	4,000,000	1,200,000	5,200,000
2009 年度	4,500,000	1,350,000	5,850,000
年度			
年度			
総　計	12,900,000	3,870,000	16,770,000

研究分野：工学
科研費の分科・細目：建築史・意匠
キーワード：文化的景観、文化遺産、無形遺産、信仰に関わる文化遺産、文化多様性、持続可能性

１．研究開始当初の背景

人間の文化的諸活動の結果としての景観を保護することは、その文化の多様性を尊重し、保存することに他ならない。「文化的景観（cultural landscape)」は、1992 年の第 16 回世界遺産委員会において、従来の建築や考古遺跡といった物質中心の保護制度から、農耕や狩猟、漁業といった自然の利用形態、口承で語り継がれた文化など世界の多様な文化表現を保護するため、無形の価値の認識、自然環境への連携に注目するものとして、世界遺産条約に新しい概念として導入された。世界遺産リストに登録された文化的景観は 2006 年現在 50 件を超え、その重要性がますます認識されるようになった。

この世界遺産条約における新しい文化的景観の導入に呼応して日本においても、計画された庭園や文学に関連する景色など従来から存在した「名勝」の保護に加えて、2004 年の文化財保護法の改正により、「地域における人々の生活又は生業及び当該地域の風土により形成された文化的景観」を保護することを定めるに至った。また 2004 年に「紀伊山地の霊場と参詣道」が文化的景観として世界遺産に登録されたことから、日本においても信仰に関する文化的景観の保護が急務となってきている。日本には、古来より神仏混淆、山岳信仰といった多様な信仰の形態が存在し、それに関する多様な文化的景観が存在している。

文化的景観は、そこに暮らした人々による集落・都市の形成過程、気候風土、農林水産業や工業の発達、絵画や詩歌などの文学との関わり、そこでおこなわれた出来事、信仰のあり方、などに関わる多様な価値を持っている。文化的景観には、その背景にある文化的価値を理解し、それに適した保護手法を構築することが求められている。

２．研究の目的

本研究は、文化と景観のあり方、そして人間の文化的諸活動の結果としての文化的景観の保護手法に関する研究の一環として、平成 16～18 年度に行った「文化的景観」概念の成立とその国際比較に関する研究の成果を基礎に、文化的景観の中でも、遺産保護にとって最も今日的な問題である信仰に関わる文化的景観の保護の困難さに注目し、その保護手法の方向性について各国の事例調査を含めて総合的に調査･分析することを目的としている。

３．研究の方法

信仰に関する文化的景観の保護には、聖域と文化財としての保護のためのマネージメントの関わりが他の分野と異なる大きな問題となる。

また、文化財としての社会的存在としてその価値を共有する場合には、その信仰者の集団の持つ世界への他者からの影響や侵入といった問題が存在する。その価値を維持しながら保護するためには、何がその集団にとって重要な要素、聖域であるのか、その空間的広がりのあり方、それらの伝統的な維持管理のための集団や手法について理解することが必要である。

本研究では、以上の視点のもとに、①各国の信仰に関わる文化的景観保護について、関係政府機関・専門家へのヒヤリングを含む事例調査、②日本の信仰に関わる文化的景観保護について、関係地方公共団体・専門家へのヒヤリングを含む事例調査、③信仰に関わる文化的景観の概念及びその保護制度に関する国際的な動向・研究実績について、関係国際機関において関係者へのヒヤリングを含む調査・情報収集をおこなう。

４．研究成果

(1)各国事例調査

①インド・マジュリ島（2007 年度）

世界遺産委員会で 2006 年情報照会、2009 年審議延期の審査結果を受けたインドの文化的景観「アッサム地方ブラフマプトラ川中流域のマジュリ島（River Island of Majuli in midstream of Brahmaputra River in Assam）の調査を行った。稲葉、鈴木、赤坂及び海外研究協力者 Dinu Bumbaru（当時 ICOMOS 事務局長）で行った調査には、インド政府の委託を受けて同島の建築・景観の詳細調査及び世界遺産申請書改訂版の作成業務を行っている建築家 Poonam Thakur 氏が同行し、関係資料の提供及び現地での調査協力を得た。

インド・アッサム地方には、16 世紀にシャンカラデーヴァ（Shankardeva）が起こしたヒンドゥー改革運動（新ヴィシュヌ派）の拠点となったサットラ（Sattra）と呼ばれる僧院が数多く残る。サットラは、共同体を形成し、伝統芸能の伝承と普及を通じてアッサム地方特有の文化を形成する重要な役割を担ってきた。インド政府はこのサットラが集中的に残るマジュリ島とその周辺約 14 万 ha を、アッサム文化を伝える文化的景観として世界遺産に申請した。しかしその審査に際して ICOMOS は、島の景観形成過程とサットラの活動との関係が希薄なことを指摘し、文化的景観としての審議延期を勧告した（2006 年委員

会での決定は情報照会、2009 年の再審査では後退して審議延期)。サットラの建築が非常に素朴で保存状態もよくないところから、有形遺産としての評価が難しいことも指摘されている。一方、サットラで継承されるサットリヤ舞踊などの芸能は無形遺産として高い価値評価を受けており、ユネスコ無形遺産リストへの登録が適切であることも指摘されているところから、無形遺産としての価値にも視野を広げて、無形と有形、景観・空間の遺産概念の相違と類似に視点を置いて調査を行った。また景観の物理的要素と Sattra の文化的価値との関係についても検証を行った。有形遺産と無形遺産、特にユネスコ世界遺産条約と無形文化遺産条約のそれぞれが定義する「文化的景観」と「文化的空間」の境界領域について研究する重要な遺産であることを確認した。

②トーゴ共和国・クータマクー（2008 年度）

世界遺産一覧表に文化的景観として 2004 年登録されたトーゴ共和国「クータマクー、バタマリバ人の土地(Koutammakou, the Land of the Batammariba)」の調査を行った。稲葉、鈴木ほか研究協力者１名、及び海外研究協力者 Dinu Bumbaru（当時 ICOMOS 事務局長）で行った調査には、当該遺産の調査及び保存管理計画の策定に携わった ICOMOS 会員・建築家 Gael Amoussou 氏が同行し、関係資料の提供及び現地での調査協力を得た。

トーゴ共和国の北部、ベニンとの国境にまたがって、泥で造った円筒形の特異な様式の住居に住み、固有の伝統的な生活様式を伝えるバタマリバの人々が住む集落が広がっている。そのトーゴ側約 5 万 ha が、文化的景観として世界遺産一覧表に登録されている（ベニン側は追加申請を準備中)。ユネスコ世界遺産センター及びイクロムがサブサハラ・アフリカ地域で進める「Africa 2009」プログラムの枠組みで文化的景観としての遺産価値の研究、保存管理計画の策定が進められ、進化し生きている文化的景観（evolving living landscape）として世界遺産一覧表に登録された遺産である。近代化の影響を受けていない伝統的な生活スタイルが土着の信仰とともに生きているアフリカの文化的景観の典型的な例の一つであるが、地元にはその準備が全くない遺産を、国際機関が先導して世界遺産登録の準備を進めた点が今後の経過観察を必要とする。開発の影響を全く受けていないアフリカ奥地の伝統的な集落が世界遺産登録を受けることにより受ける影響、登録後の変化、特に観光化の進展具合、持続可能な開発の新たな可能性の有無などに注目して調査を行った。このタイプの文化的景観については、変化をどのようにコントロールしていくかが保存管理計画を策定する上での重要なコンセプトとなるが、現状では国から派遣されている常勤職員は１名のみで組織、予算とも全く手当てできていない状況にある。開発途上国において、進化し生きている文化的景観である遺産を保護することが、開発援助に果たす役割について検証する重要な遺産であることを確認した。

③モンゴル・オルホン渓谷（2008 年度）

モンゴル「オルホン渓谷の文化的景観（Orkhon Valley Cultural Landscape)」の調査は、稲葉が、ユネスコ及びモンゴル政府が開催した当該遺産の保存管理計画改訂のためのワークショップに参加期間中に、これと平行して行った。ワークショップに参加したモンゴル政府の文化遺産保護から地域開発計画、住宅向上計画に至る広範な関係者から情報提供を受けた。

モンゴルの首都ウランバートルから西へ約 400km、現在のハラホルン市からオルホン河流域に沿って南北に延びる約 12 万 ha の範囲が、オルホン渓谷の文化的景観として世界遺産一覧表に登録されている（2004 年登録、ハラホルン市中心部は範囲外)。チンギス・ハーンが拠点を築き、モンゴル帝国の最初の首都がおかれたところで、広大な地域に点在して、あるいは地下に埋もれて残る寺院・考古遺跡群と、これに重なる現在の遊牧民の生活景観に、遊牧文化の歴史を総合的に伝える価値が認められている。遊牧民の日常生活に組み込まれた伝統的な生活様式、そしてこれと不可分の民俗的な信仰の要素が、定住・現代化が進む生活スタイルの変化により受ける影響、生業の中でも維持が難しい遊牧民の生活景観の維持に対して政府が講じている保護施策、また現地に育ちつつある民間運動の例としてチベット教僧院が行う文化遺産保護啓発活動などについて調査した。またソビエト連邦崩壊後、連邦の影響下にあった各国がアイデンティティの再構築を目指す中でモンゴル政府もかつての帝国の首都であったこの地域の再開発を計画しており、これに関する情報も収集した。

遊牧など移動して生活する人々の文化的景観は、世界遺産委員会が重点項目としてきた分野である。遊牧景観の最初の登録例として、人工的な要素をほとんど有しない景観から何を価値要素として抽出するか、保存の対象をどの側面に絞るかを研究する重要な事例であることを確認した。

④フィリピン・コルディリェーラの棚田群（2009 年度）

アジア・太平洋地域から最初の農業に関する文化的景観として世界遺産登録されたフィリピン共和国イフガオ州の「フィリピン・コルディリェーラの棚田群（Rice Terraces of the Philippine Cordilleras)」の調査を行った。稲葉、鈴木ほか研究協力者３名で行っ

た調査には、イフガオ州政府先住民族国家委員会事務局 Esther Nalliw-Licnachan 氏、州政府プログラムコーディネーターRachel B. Guimbatan 氏ほかの協力を得た。また地元で棚田の保全活動を行っている NGO「Save the Ifugao Terraces Movement」代表 Marlon Martin 氏の協力も得た。

ルソン島北部コルディリェーラ山岳地帯には、この地域に住む少数民族が山腹の急斜面を開き、長い時間をかけて作り上げてきた分布面積、高度差とも有数の規模を誇る棚田群が広がっている。折り重なる山々の谷から谷へ、いたるところに築かれた棚田とその石垣、その間に点在する伝統的な高床住居の集落の壮大な景観は海外にも知られ、そのうち保存状態が良好なイフガオ州の４行政区５か所の棚田が 1995 年世界遺産に登録されている。

コルディリェーラの棚田群は、生業に関わる文化的景観の新たな可能性への期待を担って制度導入の最初期に世界遺産登録された遺産であるが、しかし 2001 年には危機遺産リストに登録されることとなった。危機遺産リスト登録の主たる理由は過疎化や生活スタイルの変化などに伴う耕作放棄であり、農業景観を保護する際の各国に共通する根本的な問題点が提示されている。

世界遺産登録後約 15 年間を経た時点での保全状態を、棚田の耕作放棄・栽培作物転換の状況（米作から野菜栽培への転換が部分的ではあるが始まっている）、集落景観の変化（伝統的な木造草葺の高床住居からコンクリート造鉄板屋根の平屋住宅への改造、現代生活に適合する居住面積確保のための増築・別棟の建設）、道路などインフラ整備の進展状況が地域共同体の生活スタイルに与えている影響などについて調査した。

イフガオ州のこの地域では、「イフガオ族の歌、ハドハド詠唱（The Hudhud Chants of the Ifugao）」がユネスコ無形文化遺産一覧表にも登録されている。地元では民俗文化財の記録調査、例えば伝統芸能、工芸、技術などの知識を継承する人々のリストを作成して聞き取りを行う事業などが始まっている。地元青年層による棚田保全・地域文化振興のための活動も活発である。開発途上国の文化的景観において、自立し、かつ持続可能な保護体制の萌芽がみられる重要な事例であることを確認した。

(2)国内事例調査

国内の事例調査については、2007 年度においてはまず、現在までに日本でおこなわれてきた信仰に関わる文化的景観保護の特徴を抽出することに努めた。特に、文化財保護法により名勝として指定された信仰に関わる文化的景観について調査・研究を行った。2008 年度及び 2009 年度は、すでに信仰に関わる文化的景観として世界遺産登録されている「紀伊山地の霊場と参詣道」の保全状態の調査、日本で今後保護の対象となり得ると考えられる多様な信仰に関わる文化的景観の価値とその保護手法について研究をおこなった。例えば富士山を事例に山岳信仰である文化的景観について、また長崎のキリスト教会堂群を事例に異文化における宗教の受容の過程を伝える文化的景観の価値とその保護手法について調査・研究を行った。

(3) 信仰に関わる文化的景観の概念及びその保護制度に関する国際的な動向・研究実績の調査

信仰に関わる文化的景観として登録された世界文化遺産及びその候補物件の顕著で普遍的な価値とその内容、保存状況について、ユネスコ世界遺産委員会やイコモスなど国際機関から情報を収集し、分析をおこなった。

文化と景観およびその保護手法の研究については、2010～2012 年度に継続し、信仰に関する文化的景観から、土地と海の利用に関わる文化的景観に範囲を広げて調査研究を予定している。

５．主な発表論文等

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計３件）

①稲葉信子、世界遺産講座１～６、文化庁月報、2008 年 4, 6, 8, 10, 12 月号、2009 年 2 月号、2008、2009、査読無 （「世界遺産の概念－文化と自然をどうとらえるか」ほか）

②稲葉信子、顕著な普遍的価値とは何か－諮問機関 ICOMOS・IUCN の分析、月刊文化財、文化庁文化財部監修・第一法規株式会社発行、541 号、pp. 22-25、2008、査読無

③稲葉信子、「顕著な普遍的価値」をめぐる議論について、月刊文化財、文化庁文化財部監修・第一法規株式会社発行、529 号、pp.24-27、2007、査読無

〔学会発表〕（計３件）

①INABA, N. Conserving and managing cultural landscapes in Japan, keynote speech to 2010 Montreal Round Table: Conserving Cultural Landscapes, Canada Research Chair on Built Heritage, Université de Montréal, Canada, 10-12 March 2010

②INABA, N. Intangible and tangible - Asian perspectives in the on-going heritage discussions, keynote speech to the International Conference－Heritage in

Asia: Converging Forces and Conflicting Values, National University of Singapore, Singapore, 8-10 January 2009

③INABA, N. International Perspective of Cultural Landscape, presentation at the UNESCO Workshop on the Integrated Value-based Management of Orkhon valley Cultural Landscape World Heritage Site, UNESCO Beijing Office / the Mongolian National Commission for UNESCO, Kharakhorin / Orkhon Valley, Mongolia, 25-28 August 2008

〔図書〕(計２件)
①INABA, N. (2009), Authenticity and heritage concepts: tangible and intangible - discussions in Japan, In: Stanley-Price, N. & King, J. (eds.) Conserving the authentic: essays in honour of Jukka Jokilehto. ICCROM Conservation Studies 10 (Rome: ICCROM) pp.153-162

②稲葉信子、世界遺産条約と文化的景観－文化と自然への統合的アプローチー、『環境文化と政策』、東信堂、pp.29-64、2008 年

６．研究組織
(1)研究代表者
稲葉　信子 (INABA NOBUKO)
筑波大学・大学院人間総合科学研究科・教授
研究者番号：20356273
(2)研究分担者
斎藤　英俊 (SAITO HIDETOSHI)
筑波大学・大学院人間総合科学研究科・教授
研究者番号：30271589
黒田　乃生 (KURODA NOBU)
筑波大学・大学院人間総合科学研究科・准教授
研究者番号：40375457
平賀　あまな (HIRAGA AMANA)
筑波大学・大学院人間総合科学研究科・研究員
研究者番号：90436270
(3)連携研究者
赤坂　信
千葉大学・大学院園芸学研究科・教授
研究者番号：30143267
鈴木　正崇 (SUZUKI MASATAKA)
慶應義塾大学・文学部・教授
研究者番号：10126279
宮田　繁幸 (MIYATA SHIGEYUKI)
独立行政法人国立文化財機構東京文化財研究所・無形文化遺産部・部長
研究者番号：20342941
(4)研究協力者
大和　智 (YAMATO SATOSHI)
文化庁・文化財部・参事官
本中　眞 (MOTONAKA MAKOTO)
文化庁・文化財部・記念物課主任文化財調査官
ウーゴ　ミズコ (UGO MIZUKO)
学習院女子大学・国際文化交流学部・准教授